

推薦文

福 本 雅 一

児島君が急に死んで、やりきれなくなった私は、せめて遺稿集を出そうと決心した。およそ四閱月、漸く刊行にこぎつけたが、それには私が哀辞を書かねばならない。しかもこの追悼号の締め切りには時間がなく、私は断念せざるを得ない。幸い彼のために書いた推薦状がのこっているのです、それをもって責をふさぎたい。書かれたのはおよそ四年前のことである。

推薦状

私は中国文学と文化史を研究してきた福本雅一と申す者でございます。私は六十五歳から五年間、奈良から東京の国学院大学に移り、その後半の三年間、故松浦友久先生から招かれて、早稲田の中文の大学院と四年の演習を担当しました。その時、松浦先生は明清文学を研究したいと望む児島という優秀な学生がいるので、ぜひ指導してやってほしいと依頼されました。

同君は私の二つの講義に欠かさず出席したばかりか、国学院の大学院まで聴講にきました。聞けば彼は、名門日比谷高校より早稲田の文学部に進み、初め日文を専攻し、露伴を研究していたそうですが、私の『運命』の注を読み、それに触発されて中文に転じたそうです。以後、私が退職してからも、停年退休を機に始めた私の自費出版、それもすでに十年を越えておりますが、その刊行を全力で支援してくれ、耳目の老化甚だしい私に代って、再査・校正・パソコン入力などを、一手に引き受けてくれています。同君は篤実温厚の性でよく勉強し、論文の数でも同輩を遙かに擢んでいよう。また読書範囲も広く、私の四万冊に達する蔵書も、すぐに検索できるほど記憶力にもすぐれております。

由来、唐以前に比べ、明清は必要文献の数も多く、あらゆる文化事象が複雑

に発達しているため、研究に多大の労力と資力が要求されます。このような負担に耐え得る者は極めて少なく、私の後継者などはないと諦めていた時に、同君のような好学有為の同志を得たことは、私にとっても大きな喜びです。同君はまた上海復旦大学に一年間留学し、中国語にも堪能で、その点でも役に立つと思われます。

ただ彼が生活のため、東奔西走の毎日に貴重な時間を費やし、研究に全力を投入できない現況は洵に遺憾で、貴校のご好意で専任に採用して頂ければ、彼もきっと今に倍する業績を挙げることができると、私は確信し、断言して憚りません。

もし先生の一挙手一投足の労を以って、彼を清波に転じ、学問の大海に放ってやって頂けるならば、彼のみならず、衰老の私にとっても望外の幸せです。何卒先生のご配慮を賜りますよう。伏してお願い申し上げます。

敬具

福本雅一

□□先生玉案下

親愛なる児島君、早速拙文を草してみましたが、不満な点があればすぐ訂正しますので直ちに応答すること。